
ユーノ・スクライア外伝の外伝！

レオーネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユーノ・スクライア外伝の外伝！

【Zコード】

Z0851X

【作者名】

レオーネ

【あらすじ】

ユーノ達の世界『ミッドチルダ』に偶然やつてきた人達の物語。
レオーネが書くユーノ・スクライア外伝の新しき外伝。

参戦作品紹介とお詫びプロジェクト

参加作品（変更有り）

ユーノ・スクライア外伝

デジモン×オリジナル、らき すた、ハヤテの「」とく!、
ガンダムシリーズ×涼宮ハルヒちゃんの憂鬱、ちびまる子ちゃん

高町ヴィヴィオ外伝を見てくださった皆様、重要大事様、大変申し訳ありません！

高町ヴィヴィオ外伝は色々と失敗して、挫折してしまいました。
そこで、また一からやり直そうと考えました。

一度挫折してしまったユーノ・スクライア外伝の外伝作品をもう一度書きます！更新が遅くなるかもしれません、どうぞよろしくお願いします！

プロローグ

ユーノ達が知らない地球のことだった。

そこでの日本のあるゲームセンターのことだった。

アルト「こなちゃん何の『デジモン』？」

こなた「あたしはアグモンだよ。アルト君は？」

アルト「俺はブイモン！」

つかさ「あーテリアモンだー！」

かがみ「おーガブモンね！みゆきは？」

みゆき「私はピヨモンです」

アルト「ナギは？」

ナギ「私はレナモンだ」

ハヤテ「僕はギルモンです」

この7人が何をしているかといつと、新しく稼働される『デジモンオンライン』をするべく、『デジモンペンドュラム』を買つていたのだ。『デジモンオンライン』はペンドュラムを差し込んでゲームをするのでペンドュラムは必要なのだ。

アルト「早く行こう！」

かがみ「はいはい（笑）」

一同が『デジモンオンライン』をプレイする同じ頃、静岡では…

まる子「たまちゃんは何のモビルスージだった？」

たまえ「私はブリッジガンダムだよ、まるちゃんは？」

まる子「あたしゃリックディアスだよ…はあーあたしもガンダムタ
イプが良かつたよ…」

まる子を初めとする3年4組のクラスメートは、『デジモン』と同じく

稼働された『ガンダム ドリームバーサス』をプレイすることに。ガンダムドリームバーサスとはガンダムのオンラインゲームで、プレイした回数や勝利数によって、選べるモビルスーツが増えてくるというもの（最初は各作品の序盤に出ていた機体のみ）。

花輪くんは金持ちなので、アーケードの機器を1日貸し切りにできるので店に並ばずとも3年4組のクラスメートは皆でプレイすることができたのだ。

他の誰がどの機体に乗るかは次回から分かれます。

同じく岐阜でも、涼宮ハルヒ率いるSOS団がガンダムをしていた。

ハルヒ「シャアザクかあ、悪くないわね！キヨンは？」

キヨン「エクシアだ」

ハルヒ「エクシア！？キヨンの癖に生意気ね」

キヨン「悪いかよ！」

古泉「因みに僕デュナメスです。は長門さんは何の機体に？」

有希「デスサイズ」

みくる「このまるっこい機体ですか～？」

古泉「これは…カプルですね」

こうしてただゲームして遊んでいる者達だが、この後大変なことになる。

アルト「なんだ？」

ゲームを終えたアルト達の足元に魔方陣が現れた。
まる子達やSOS団も同じだった。

そして魔方陣が光を放ち、おさまった時にはそこにいた人間は誰一

人いなかつた。

たゞり着くその場所は（前書き）

遅くなりますとみません！

たどり着くその場所は

その時、アルトが初めて見たのはブイモンだった。アルトは一度目を擦り、自分の頬をツネつてみるが…

ブイモン「何やつてんだ？」

アルト「ええええ！」？

突然ブイモンが喋り出した。

アルト「ブ、ブイモンだよな…」

ブイモン「そうだよ」

アルト「俺のデジモンの

ブイモン「ああ」

アルト「何故にここへ？」

ブイモン「わからんねー」

アルト「だつて、そもそもお前これの中に…」

アルトはデジモンペンデュラムを取りだそつとしたが、出てきたのは別の物だった。

スマートフォンだろうか…そんな形をして、色は水色。

アルト「これは一体…それに此処は」

周りを見渡すと、何か沢山のロッカーがある。すると、誰かが近づいてくる音がした。

アルトは隠れそうな場所を探して、掃除用具入れを見つけ、ブイモンと共にそこに隠れた。

ブイモン「どうしたんだよアル…ん！」

ブイモンの口を塞いで用具入れから覗いてみる。

そこには、アルトの一つ下の女の子達（アルトから見てそう思えた）が制服を脱いでいた。

アルト（！？）

そこでわかった、ここは日本ではない（生徒達の見た目でわかったこと、それと日本ではないどこかの学校である）こと、そしてその学校の…

アルト（更衣室だとオオオオオオオオオオ！？）

その頃

キヨン「レーベルヘ…」

キヨンは乗客船の中にいた。

頼みの綱である長門に電話したくても、電波がない場所にいるのか通じない。

キヨン（ハルヒの奴、今度は何を望んだんだ？）

キヨンは自分の腕に付いている機械を見た。
画面が付いていて、白い体をした機械だった。

何気なく画面に触れてみると、そこからキヨンの前にモニターが現

れた。

また触れてみるとモニターが消えた。

何だつたのか…

そう思つていた時だつた。

? 「ズバリ！ 貴方にお聞きしたい」とあります！」

メガネを掛けた変な喋り方をする少年に話しかけられた。

キヨン「（なんだこいつ！？）な、なんだい？」

? 「貴方が付けているそれは一体どういう物かご存知でしょうか？」

キヨン「さ、さあな…」

? 「では…この船は何処へ向かつているのでしょうか？ 気が付いたらこんな所に…」

キヨン「おい、それ本当か！？」

キヨンはメガネの子供と話した。

子供の名前は丸尾末まるのお男すくお。

キヨンと同じく、気が付いたらここにきて、キヨンと同じ物を付けていた。

しかも、彼の此処にくる前の行動もキヨンと同じだった。

丸尾「ズバリ！ 私達は迷子になつたでしょー！」

? 「へへ、丸尾君じゃないか」

今度は茶色い髪の、奇抜な髪型をした少年が現れた。

丸尾「おおー花輪君ー！」

丸尾曰く、この花輪といつ少年はかなりの金持ちだとか。

花輪「それより、この船なんだけど、クラナガンといつ場所に向かつているらしいんだ」

キヨン（クラナガン？なんだそれは？なんか面倒なことになりそつだな…）

まる子「疲れた…あたしゃもう歩けないよ」

つかさ「あの公園のベンチで休む？」

たまえ「そうしよ、まるちゃん」

まる子、たまえはクラナガンの街中に迷いこんで、同じ境遇の終つかさと行動をとつている。

歩いてくだけでも、自分達の知つている世界とは違つことがよく分かつた。

テリアモン「まる子は体力ないな」

まる子「うるさいよ！はあ、ここが地球じゃないなんてあたしゃまだ信じられないよ」

たまえ「私も…」

?「つかさん？」

突然、誰かに声をかけられた。

つかさ「ん？ ゆきひちやん…？」

みゆき「やつぱつつかせさんでしたか！」

ピヨモン「みゆき、この人は？」

みゆき「私の友人の柊つかせさんです」

みゆきはピヨモンを連れていた。

つかせ「ゆきちゃんもピヨモン連れてるんだ～」

テリアモン「やつほ～」

みゆき「まあ、つかせさんもですか！」

まる子「つかせさん、この人は？」

つかせ「私の友達の

みゆき「高良みゆきと申します」

それからつかせ達は雑談していた。

たまえ（あれ？何か忘れてこるよつたな…）

チンピラ「またピラ～！」

チンピラ2「逃がさねーぞー！」

みくる「ひえ～（泣）」

ハヤテ「しつこい連中ですねー！」

一方、ハヤテとナギはチンピラ達に絡まっていたみくるを助けようと、連れて逃げていた。

チンピラ「ここまでによつだなあ」

ハヤテ「お前達がだけね」

チンピラ「ああー?」

「ファイアーボール!」

「狐葉楔!」

チンピラ「ぐわああああ!」

チンピラ「ぎゃああああああ!」

ハヤテのギルモンのファイアーボールとナギのレナモンの狐葉楔が効いたのか、2人はピクリとも動かない。

ハヤテ「路地裏の方が見られないですのでよかったですよ
みくる「あのオ、助けて頂き、ありがとうございます。」
ナギ「礼にはおよばん」

ハヤテ「それより、ここは一体何処でしようか?」
みくる「私にも解りません、気が付いたらこんな所に...」

アルト「行つたかな?」

女子達がいないのを確認して、ロッカーからであるアルト。
しかし...

「 「 「 キヤー————！」」

外から悲鳴が。

見てみるとそこには

クワガーモン「グワー——！
サイクロモン「グオー——！
コカトリモン「コケ——！」

デジモンが暴れていた。

アルト「どうなってんの」「れー？」「

? 「キヤー——誰ですか！？」

アルト「（やべー！）と、通りすがりのティマーだ、よく覚えておけ
！ブイモン！」「
ブイモン「オッケー！」

アルトは嘘（あながち嘘ではないと思ひけど）を言つて臨戦体勢を
とる。

一方、街ではモビルスーシやデジモンが暴れていた。
まる子「な、なんなのさあればー？」

キーテン) 次回へつづく

戦闘～アルト編～（前書き）

お待たせしました！毎度更新が遅くてすみません（汗）

戦闘／アルト編

アルト「さて、どうしようか…」

アルトは自分が「デジモンカード」を持っていることに気がついた。アニメではカードを「デジヴァイス」にスラッシュする所があったが…アルトはカードを「デジヴァイス」画面に当てるみた。

アルト「カードスキヤン！モジャモン、骨骨ブーメラン！」
ブイモン「うおいりやーーー！」

ブイモンは「カードスキヤン」で出てきた骨骨ブーメランを「コカトリモン」に投げた。

コカトリモン「コケーー！？」

「コカトリモンは反撃しようとしたが、ブーメランなだけに戻つてくるのにも当たつた。

ブーメランの一連撃によつて「コカトリモン」を倒した。

アルト「おっしゃー次！」

今度はサイクロモンが現れた。

サイクロモン「グワーーーーーーーー！」

サイクロモンの異様な片手が迫るも、ブイモンとアルトは無事避け

た。

アルト「カードスキヤンーレオモン、
ブイモン「うおおおおおおおおーーー」

દ્વારા - - - - -

サイクロモン「ゴワー！」

サイクロモンもバッタリと倒れ、消えていった。

アルト「んじゃ最後に…！？」

なんとケワガーモンは空を飛んで逃げていった。

その先が中等部で、あの少女に出くわすとは知らずに……。

ヴィヴィオがいる中等部ではクワガーモンが来たことにより大パニックになっていた。

エルモンが浸入してきた。

逃げ回る生徒たちを襲う三体のデジモン。駆けつけて、それを見たアルトは絶句した。

成熟期がまた三体も…
そんな時だった。

? 「おーいアルトくん！」

聞き覚えのある声がして振り向いたら、そこには泉こなたと柊かがみがいた。

アルト「2人ともここから離れてー！」

こなた「その必要はないよ。アグモン」

かがみ「ガブモン！」

こなたのパートナー、アグモンとかがみのパートナー、ガブモンが現れた。

かがみ「ガブモンはセーバードラモンをお願い！」

こなた「じゃあアグモンはモリシェルモンでね」

アルト「ブイモンはクワガーモンを倒せ！」

「――おう――」

アルト達の指示に合わせてデジモン達が動く

「ブイモンヘッド！」

「ベビーフレイム！」

「プチファイアー！」

三体はそれぞれの技を出すが、成熟期相手には効かない。

こなた「むー、効かないか…」

かがみ「どうするのよ！？」

? 「あ、あの…」

かがみ「？」

? 「進化とかしないんですか?」

」なた「おお！その手があつた！」

アルト「でもできるかな？」

かがみ「…やつであるしかないみたい…」

アルト達が話している内にアイモン達が満身創痍になっていた。

アルト「ブイモーン！！」

その時だつた

「アハト、これに…」

19

こなたは少女に聞いた。

その時、こなたは気づいた。

「なた（あれ？）の子つてまさか…」

? 「はい、一度デジモンの事件が起きたので」

こなた あの、君の名前は...」

? - 高町ウイウイオです。ママは時空管理局の

その時のこなたの叫びは学校中に響いたという。

戦闘～キヨン編～（前書き）

また随分と遅くなりました！

本当に申し訳ありません！

そして今回もページ少なくてすみません！

戦闘～キヨン編～

船の中でキヨンが丸尾と花輪と共にゆっくり通り過ぎていた時だつた。

突然船内に警報が響いた。これには皆ビックリしたが、その後にはアナウンスが聞こえた。

『乗客の皆様にお伝えします、アンノウンが船に近づいています。乗客の皆様は、中に入つて下さい。繰り返します…』

と、言われても、客達はまだ困惑気味だつた。
その時、ドン！と大きな音が鳴り、船が揺れた。

何処かが爆発したのか… それとも、アンノウンといつもの攻撃を受けたのか。

乗客達はパニックに陥る。

『アンノウンが攻撃してきました、乗客の皆様は船の内部に避難してください』

キヨン「何にやられたんだ！？」

キヨンは窓の外を覗いた。

外にはロボットのような物が銃を持って、船に撃ち続けている。

乗客1「なんだあれは！？」

乗客2「ガジェットか！？」

他に、外を見た乗客はそういつ。

キヨン（ガジェット？そいつがどんな奴か知らないが、あんたらの
知ってる奴じゃないだろ？よ…あれは…）

丸尾「ズバリ！モビルスーツでしょ！」

丸尾が突然割つて入つて来た。

キヨン「ビビらせんな！あと顔が近い！」

キヨンは丸尾の顔を遠ざける。

花輪「確かに…あれはガンダムSEEDに出てくるティンだつたね」

花輪くんも、窓から奴らを覗いて言つ。

しかし、なぜそんな物が…

その疑問は、次に現れる者を見た瞬間に頭の中から消えた。

キヨン「なんだありや…？」

花輪「人が空を飛んでる…！」

丸尾「ズバリ！あの人は誰でしょう…？」

丸尾は近くの乗客に聞いた。

乗客「時空管理局の魔導士さん達だよ、知らないのか…？」

キートン【当然である】

乗客「でもまあ、管理局が来たからもつ安心…」

乗客2「いやまて…？管理局が押されて…いるぞ…」

みると魔導士達は『トイン』に落とされていく。

乗客「何故だ！？」

乗客2「なあ、ガジェットが持つてゐるあれば質量兵器じゃねえのか！」？」

ミッドチルダでは、銃や火器といった物を使つたり作つたりするのは禁止されている。魔導士達がバリアジャケットで防げるのは魔法の攻撃のみ。

しかし、本当のマシンガンやビームライフルだったらマジで管理局側が不利なので、今作は魔力で構成された弾やビームを撃つということにする。

まあ、不利だという事実は変わらないが…。

丸尾「ズバリ、またピンチでしょー！」

そんな時だった。

もの凄い速さで『ティン』を破壊する魔導士がいた。

大きい鎌のような武器を持ち、黒いバリアジャケットを身に包んだ金髪の美しい女性だった。

フロイト視点

フロイト「シャーリー！ 戦況はどうなつてゐるのー？」

フロイトはモビルスーツの襲撃を受けている船に向かつて行つた。

シャーリー『先に向かつた空戦魔導士達が押されています。情報に

よると謎のガジットは質量兵器じき物を持つていぬやうです。
気を付けてください。』

フェイト「わかった！ありがとう！」「フェイトはシャーリーとの通信を終えた時、モビルスーツ（フェイトから見たら謎のガジットだが）と魔導士達の戦闘を田で確認できた。

フェイト「行くよ、バルティッシュ！」

バルティッシュ『了解！』（英語は面倒なのでこの作品では日本語）

フェイトは鎌と化したバルティッシュでティンを破壊していく。

フェイト「ホントに質量兵器を持つてる！？」

しかも後から後から次々と現れる。

出てくるのはティンに限りない。

ガンダム〇〇に出てくるフラッギやイナクト、ガンダムに出てくるアッシマーもいた。

それも相当な数。

フェイト「どれだけ来るの！？」

フェイトはソニックフォームになつて、敵を斬り落としていくが、アッシマーはフェイトの攻撃を避けていた。

（あの機体…他の奴とは違う…）

そう想いながらも、フェイトはプラズマサンダーでアッシュマーを擊つ。

そんな時だった。

船から爆発音が聞こえて、フェイトはさすがに気を取られてしまつた。

アッシュマーはそれをチャンスと言わんばかりにビームライフルを撃つてくる。

「フェイト」ぐつ…

ギリギリのところを避けるフェイト。

応援を呼んでみようか… そう思った時だった。

船に侵入したイナクトが押し返されて、ビームライフルを撃たれて爆発した。

イナクトを倒した相手を見た時、フェイトは驚愕した。フェイト「あれは… ガンダム！？」

（キヨン視点）

今度はフラッグ、イナクト、アッシュマーもいた。

乗客「なんて数だよ…」

乗客達が不安の声をあげる。

キヨン「なんなんだよおい…！」

花輪「あの人、大丈夫かな？」

キヨン達も心配になつていぐ。

そんな時だった。

船内が爆発したかと思いきや、そこからイナクトが入つてきた。

「うわ――――――！」

「あや――――――！」

声を上げ、パニックになる乗客達。

キヨン「くそ！なんとか出来ねえのかよ！？」

その時だった。

キヨンは白い機械から出るモニターを見てみた。

そこには『Hクシアをセットアップしますか？』と描いてあった。

キヨン（もうどうでもなれーー）

キヨンはセットアップすることに決めた。

すると、キヨンの周りには突然現れた鎧があった。

そしてそれはしだいにキヨンの体に付いた。

次に武器が現れ、キヨンはそれを手に取った。

その時のキヨンの姿は

丸尾「ズバリ！ ガンダムエクシアでしょ！ 」
キヨン「うむーー。」

エクシアとなつたキヨンは武器であるGNソードでイナクトを斬り、船から追い出す。

そしてGNソードをライフルモードに変えて、一発撃つた。

それも受けたイナクトは爆発した。

その爆発に気付いたのか、金髪の魔導師がエクシアを見て、驚いた。

「あれは… ガンダム！？」

エクシアになつたキヨンに気を取られているフェイト。

その隙に、アッシュマーがビームライフルを撃つてくる。

フェイト「しまつた！？」

キヨン「やられせるかよ！」

しかし、キヨンが間一髪でシールドで防いだ。

キヨン「大丈夫ですか？えーと…名前は？」

フェイト「え…あ！フェイト・T・ハラオウンです」
ガンダムを間近で見て一瞬ボーッとしたフェイト。

フェイト「さつきはありがとう…ガンダム君」

キヨン「今はそうですが俺も人間なので…それよりもコイツらを」

キヨンが大量のMSを見た時だった。

?「へーイ、MR・キヨン」

キヨンがいた船から、ガンダムタイプのMSが現れた。

キヨン「そのウイングガンダム…花輪か！？」

花輪「ビンゴ！僕らも白い機械をイジつたら出来たのさ」

丸尾「ズバリ！私もいるでしょ！」

ウイングガンダムと化した花輪と、ド・ダイ改に乗ったガンダムマークエイ（エュー・ゴ仕様）と化した丸尾も来た。

キヨン「全員であいつらを片付けるぞ！」

花輪「オッケー」

丸尾「了解です」フェイト「あーちょっと…」

フェイトは彼らを止めようとしたが、無理だった。

フェイト（あの子達にやらせる訳には行かない！）

そう思い、フロイトもTVを破壊しようとした時だった。

? 「花輪くぅ～ん！」

フロイト「…？」

花輪「…？」

どこから来たのか、ピンク色のティエレンと赤いザク（ド・ダイに乗つて）が現れた。

そしてそのティエレンとシャアザクから発する声。

花輪はその声を聞いて背筋を凍らせた。

キヨンは「まさか…」と呟いた。

さて、ティエレンとシャアザクの正体が誰なのか読者の皆さんもつぶ分かりだらうか？

花輪「み、みきわさんかい…ベイビー？」

みきわ「そうよー！会いたかったわー！」キヨン「ハルヒ？」

ハルヒ「よく分かったわねキヨン！てかまたエクシアなの…？」

みきわは花輪に抱きついたが、花輪は「ヒッ！」と悲鳴をあげて避けた。

みきわ「ああん！恥ずかしがらなくてもいいわよ～

花輪「や、やめてくれたまえー！」

キヨンとハルヒは口喧嘩をしていた。

ハルヒ「とーにーかーくーキヨンにエクシアは似合わないわー!ジム
か旧ザクで充分よ」

キヨン「弱すぎるだろー。」

戦場であるはずなのに、緊張感を見せずに、らしくないことをする
4人。

それを見てポカーンとするフェイド。

カオスな空氣になっていた。

丸尾「ズバリ!そんなことしてる場合じやないでしょー!」

丸尾の一言で全員は「ハツ…！」となつた。

実は4人がそんなことをしているとき、敵MSは攻撃してこなかつ
た。

そして、全員が周りを見た時、待つてましたと言わんばかりに撃つ
てきた。

全員避けて、反撃に出た。

丸尾「ズバリ!此処からいなくなれでしょー!」

みぎわ「なんなのよーいつらー。」

ハルヒ「当たらなければ、ビリッてことないわー!」

キヨン「俺に触れるなー!」

フェイド「はああー!..」

花輪「これで終わりだよ、ベイビーー」

丸尾はバズーカやビームライフル、ド・ダイ改を上手く使って

キヨンはソードで斬りまくり

フェイトはバルディッシュュを大剣にして豪快に斬り

ハルヒとみぎわはマシンガンやヒートホーク（みぎわはカーボンブレード）、ド・ダイ（ド・ダイはハルヒのみ）を上手く使って

花輪はバスター・ライフルをフルパワーで多数の敵を撃ち落とし

それぞれが、それぞれのやり方で敵を倒していく。

時間はかかったものの、全MSを倒した。

キヨン「ふうー」

ハルヒ「私達の大勝利！」丸尾「ズバリ！生き残れたでしょう！」

フェイト「皆、その…」

フェイトが何か言おうとした時だった。

フェイト「うう…」

フェイトが突然苦しみだした。

キヨン「フェイトさん？」

花輪「どうしたんですか？」

するとフェイトは力無く落ちる。

その時、フュイトから『何か』が離れていて、海の中へ。

それをキョン達は気付かなかつた。

ハルヒ「よつとー。」

ハルヒはフュイトをキャッチした。

そのとき…

ハルヒ「ちょっとー。この人、血が出てるー。」

キヨン「なにー？」

キヨンたちは急いで、近くの病院へ飛んだ。（途中で道を尋ねながら）

（～？？？視点～～）

フュイトから離れ、海へ潜つた『ソイツ』は泳いで別の所へ移動した。

そして、別の所でそれを誰かが水晶玉で見ていた。

? 「ふふふ…いいわあ このままエースオブエースやユーノ・スクライアの持つメダルのエネルギーを始めとする魔導師達のエネルギー

「も吸っちゃいなさい…勿論、デジモンのエネルギーも与えるわ…
そしてアナタはより強く、超究極体になるのよ」

水晶玉を見ながら、その人間はうつすらと笑顔を浮かべて呟く。

ソイツは一体なんなのか？

目的は？

次回に続く！

戦闘～まる子篇～

街で暴れだす「デジモン、モビルスース、逃げ出す人々。

まる子達は茫然とそれを見ていた。

すると、二体のデジモンがやって来た。

「カトリモンとファングモンだ。

コカトリモン「コケー！コッコッ！」
ファングモン「ガルルルル…」

言わずもがな、この二体は「ちうを敵対している。

テリアモンとピヨモンは4人の前に出た。

テリアモン「つかさ達には手を出させないよ…ブレイジングファイ
アー！」

ピヨモン「マジカルファイアー！」

しかし、ファングモンは攻撃を避けてテリアモンを蹴り飛ばし、コ
カトリモンは受けても平気な顔をしている。

つかさ「テリアモン！」

みゆき「成長期のこちらは不利がありますね…」

みゆきは不安そうに呟く。

みゆき「何か打開策は…」

みゆきは考えた。

みゆき「これに何かヒントは…」

みゆきは『デジヴァイスをいじった。

するビデジヴァイスの画面に使用説明が載っていた。

『このデジヴァイスには、3つの機能があります。
パートナー『デジモン』の進化、『デジモン』の収納、カードスキャン』

みゆきはカードスキャンといつ字に田を向けた。

『カードスキャンについて

カードスキャンといつのは『デジモンカード』に内蔵されたアドレス（
肉眼では確認出来ない、『デジヴァイスを通してから見える』）を『デジ
ヴァイスにスキャンさせる。

スキャンの方法は『デジヴァイスの背につけたレンズ』にアドレスを見
せること。

以上が『デジヴァイスの機能です。』

みゆき「カードスキャン…ですか」

みゆきは持っていた『デジモンカード』『カブテリモン』をスキャンし
た。

みゆき「カードスキャン…カブテリモン、メガブラスター…」

ピヨモン「メガブラスター！」

ピヨモンの放ったメガブラスターがコカトリモンに直撃した。

「コカトリモン「クワー！？」

重たい一撃に何とか耐えたコカトリモン。

つかさ「ゆきちゃん、今のじゅうやつて…」

みゆき「これはですね」

みゆきはつかさに、デジヴァイスについて手短に説明した。

つかさ「わかった！やつてみる！」

そしてつかさはカード「ティラノモン」をスキヤンした。

つかさ「カードスキヤン！ティラノモン、ファイアーブレス」
テリアモン「ファイアーブレス！」

テリアモンのファイアーブレスはファングモンにあたつた。

しかし、とじめにはならなかつた。

コカトリモン「コケー！」

ファングモン「ガアアアアア！」

ドス！バキッ！

テリアモン「うわー！」

ペコモン「ややーーー！」

みゆき「ペコモンー！」

つかせ「テリアモンー！」

みゆきとつかせは黙り、互に顔を寄る。

ペコモン「来ちゃだめ…」

みゆき「ですが…」

テリアモン「こんなのは…ヒーマンタイ…」

つかせ「テリアモン…」

つかせは泣き声になる。

一方、まぬけ達は

まぬけ「たまちやん…私達は離れてよつか…デジモンバトルの邪魔になります…」

とか言つてゐが、つかせ達を置いてでも逃げたいと思つてこらまぬ
子。

しかし…

ザク「…・・・」

サー・ペント「…・・・」

ジン「…・・・」

まる子が逃げようとした方向からモビルスーツのザク、サー・ペント、ジン三体も現れた。

絶体絶命である（キートン）

しかしそんな時だつた。

トールギス「フッ！」

一体のトールギスが現れ、ビームサーベルで三体のMSを破壊した。

たまちやん「だ、だれ？」

トールギス「大丈夫かい？ わくらさん、穂波さん」

たまちやん「その声は… 野口さん！？」

まる子「えー！？」

トールギス「ピンポーン、正解だよ… クッククック」

なんと、トールギスは野口さんだつた。

野口「2人が持つてる機械を見てみな」

機械を取り出すまる子とたまえ。

野口「それを起動させて、なりたい機体を選ぶと、その機体になれるよ… もっとも、なれる機体が限られているけれどね」

まる子とたまちやんは実際にやつてみた。
すると…

たまちやん「うわあああーーー！」

まる子「ガンダムだよーーー！」

まる子はストライクガンダム、たまちゃんさイージスガンダムになつた。

野口「後はどうするのか…分かつてくるだろ?」まる子「うん…これなら負けないよ!」

みゆきとつかさはまだ二匹に苦戦していた。

それでもピヨモンとテリアモンは立ち向かう。

みゆき「ピヨモーン!」

つかさ「テリアモーン!」

そんな時だった。

2人のデジヴァイスが光り出した。

その光はピヨモンとテリアモンへ

『ピヨモン進化! バードラモン!』

『テリアモン進化! ガルゴモン!』

進化した二匹はもはやファングモンとコカトリモンの敵ではなかつた。

バードラモン「メテオウイニング!」

ガルゴモン「ガトリングアーム!」

コカトリモン「グワーーーー!」

ファングモン「ガアアアアア!」

「匹の技を前にファングモンとカトリモンは断末魔を上げ消えた。

つかさ「やつたー！」

まる子「ばんざーい！ばんざーい！」

勝利に喜ぶのも束の間、再びモビルスーツとデジモンが現れる。

野口「とりあえず、あいつらを倒しながら安全な場所へ行くよ！」

一同は敵の群れに突っ込む。

他の皆も同じようなことをしていた。

（ハヤテとナギとみくる）

ハヤテ「今だグラウモン！」

グラウモン「エキゾーストフレイム！」

みくる（ガンダムX）「ひえ～来ないで下さい（泣）」

ナギ「キュウビモン！」

キュウビモン「鬼火玉！」

（はまじ、関口、ブー太郎）

はまじ（ガルバルディ）「ちくしょーー！なんなんだよこいつらー！」

関口（マラサイ）「デジモンもいるし！」

ブー太郎（ハイザック）「訳が分からぬブー！」

（永沢、藤木、小杉）

永沢（ギャン）「まったく、今日はどことんついてないよ」

ガンドムサンドロック

藤木「本当だね」

ザーペント

小杉「どうでもいいだろ！それより腹へつた！」

大野、杉山

シャイニングガンドム
大野「シャイニングファインガー！」

ガンドムマックスター

杉山「今だ！こっちだ！」

大野と杉山は子供達をデジモンやMSから守っていた。

とし子、上ヶ崎、笹山

とし子「あつちへいつてー！」

上ヶ崎「もう最悪！」

笹山「お家に帰りたい！」

ナーノ視点

ナーノは焦っていた。

ある恐ろしいものを一刻も早く消すために。

ナーノ「アッシュが…成長しないうちに…」

ナーノ（未来の父さんの話が本当なら、今頃の人たちも此処にいるはず…あの人達から力を借りよう！）

果たして、ナーノが倒そうとする物は一体…

～？視点～

ここはどこだ？

俺はアイツと戦つて、アクシズを止めて…
だめだ…それ以上は思い出せない

なんでこんなところに…？

ん？モビルスー・ツ！？

妙な生き物もいるぞ！

どうやら、厄介な場所に来てしまったようだな…！

この人物は一体誰だらうか…次回へつづく（キートン）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0851x/>

ユーノ・スクライア外伝の外伝！

2011年12月25日21時47分発行